

## 銀の滴降る降るまわりに（1）

「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」という歌を私は歌いながら流れに沿って下り、人間の村の上を通りながら下を眺めると……で始まるユーカラは、知里幸恵さんが命を削って書き上げた「アイヌ神謡集」に収められている13編のユーカラの一つ「梟の神の自ら歌った謡—銀の滴降る降るまわりに」です。

国文学者でアイヌ語の研究者であった金田一京助博士は、知里幸恵さんに「アイヌ神謡集」執筆のきっかけを与えた方ですが、彼が「アイヌ神謡集」の原稿を見た時、そのローマ字表記法の見事な確立、美しい文字、日本語訳のその高い文学性に感嘆し「おお、幸恵さんは天才だ」とアイヌの天才を発見した喜びをかみしめています（中井三好著「知里幸恵」から）。

また、民俗学者であった柳田国男も、「アイヌ神謡集」の原稿を見て、「これが本当に18歳の娘の成したものなのか。まさに天才だ」と驚くと共に、ユーカラを「これこそ口承文学の最高傑作である。これこそ、世界に誇るべき叙事詩である」と全身を持って感動しています（前述書から）。

かくまで著名な学者達を唸らせ、感動させた知里幸恵さんは、今から90年前（1922年）の9月18日僅か19歳という若さでこの世を去っています。

知里幸恵さんは、登別出身のアイヌ人でしたが、標準以上に豊富な日本語を駆使することが出来ました。また、金田一博士が「私が逢ったアイヌの最後の最大の叙事詩人」と絶賛を惜しまなかった、祖母モナシノウクと一緒に生活していただけあって、内輪話をアイヌ語でする程アイヌの世界に生きていました（藤本英夫著「銀のしずく降る降る」から）。

日本語にもアイヌ語にも堪能という彼女の言語に関する才能は、金田一博士と出会うことによって、一気に開花したのでした。

なお、知里幸恵さんの弟に、言語学者でアイヌ人初の北海道大学教授となった知里真志保さんがいます。

知里幸恵さんは、1910年4月に旭川の上川第三尋常小学校に入学しますが、その後、同年9月に開校した上川第五尋常小学校に移籍させられます。こ

の、上川第五尋常小学校は1899年4月に施行された旧土人保護法に基づいて設置されたものですが、地域の和人達は土人学校と蔑称していたといいます。

また、この上川第五尋常小学校の開設について、「銀のしずく降る降る」の著者藤本英夫氏は「コタンのほぼ中央に学校が建てられたということは（中略）明治の初め以来の同化政策、アイヌの日本臣民化の成果が、子どもをとおして、急速に部落中に広がっていく、という点において、近文アイヌの歴史にとってはまさにエポックを画する大事件だった」と述べています。

知里幸恵さんは、6年生の3月北海道庁立旭川女学校を受験しますが不合格となります。しかし、その直後から「彼女は、本当は受験者中で最高点だったがアイヌであることと、クリスチャンの娘だったので不合格となった」という噂が流れたといいます。真偽のほどは分かりませんが、和人達のアイヌに対する差別意識が強かったことは確かですし、何より、そういう噂が出て不思議ではない程、彼女は成績が優秀だったようです。それは、翌年受験した旭川区立職業学校を110人中の4番で合格した事でも分かります。

知里幸恵さんは、4番という優秀な成績で合格した事を手放しで喜んでいますが、肝心の学校生活は、決して楽しいものではなかったようです。同じ生徒となった和人の子ども達は彼女と机を並べるのをいやがったといいます。彼女は、アイヌであるが故に人種的偏見、理不尽な差別や嫌がらせ等様々ないじめに耐えねばなりませんでした。

また、近文にある彼女の実家から学校までは片道6キロ以上もあったといいますが、そこを、彼女は毎日、徒歩で通っていました。教科書の外に実習材料があり、その上、雨の日には傘を持つという具合でした。旭川の冬はことのほか厳しいですから、そのような中での通学は、心臓に持病を抱える少女にとって余りにも過酷なものだったといえるでしょう。

そのような厳しい環境の中、差別にも耐えながら、知里幸恵さんは学校で学び続けますが、彼女にそうさせたのは、恐らく、自分がアイヌである事の自覚と理不尽な社会への反骨心だったのかも知れません。

「教育なんて何さ。教育って、そんなに大事なもののか。差別されてまで学校に行きたいかい？……勉強がいやになったら、自由にはばたいたらいい。強くなりなさい。」

これは、知里幸恵さんが年下のお友達に語った言葉です。彼女が如何に、社会に対しても、学校に対しても屈折した気持ちを持っていたかが良く分かります。（塾頭：吉田 洋一）